

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科
2012年度 JASSO ショートビジット派遣報告書

報告者氏名 松下 綾日

平成 23 年度 (入学)・編入

1. 研究課題:

現代インド映画の広がりの変容

2. 渡航先: インド、発展社会研究所

現地滞在期間: 平成 24 年 7 月 25 日 ~ 平成 24 年 9 月 27 日 (65 日間)

3. 今回の派遣により、申請時に自身の目的としてあげた点について得られた知見を述べてください

申請時の目的として、主に三つあった。それらは、①ムンバイにある映画検閲所での資料の収集、②国立フィルムアーカイブでの文献、AV 資料調査、③聞き取り調査の三点である。

調査の結果、申請時に挙げていた目的は達成することができた。まず、今回のフィールドワーク調査での核となる CBFC のムンバイ支部への訪問を行い、そこで出している統計データ、Annual Report を現存している 1981 年~2009 年 (1986 年は紛失とのこと) まで入手することができた。また、ムンバイ支部の officer に話を聞く機会を得、CBFC の仕組みが明らかとなった。続いて、ムンバイと同じ州にあるプネーに場所を移し、映画フィルムや資料を保管する National Film Archive of India での文献調査と映画やテレビ関係者を育成する機関、Film and Television Institute に訪問を行った。その他、映画監督、映画製作者、映画評論家の方から話を聞くことができ、CBFC が出している統計データと一致する内容のコメントが得られ、本研究において非常に有益な情報を入手することができた。今回の調査の成果を基に、今後の研究に活かしていきたい。

4. 自身の今後の海外への渡航や留学に向けた課題や長期的な展望について述べてください

今後の渡航に向けた課題は、現地語の上達である。英語やジェスチャーを交えては通じたものの、もし現地語を知っていればもっと情報が得られただろうという場面が多々あった。研究対象である映画で例を挙げると、ダブル・ミーニングである。インドの映画には、現地の人しかわからないような 1 つの単語で 2 つの意味を表す言葉がたくさんあり、映画製作者は検閲を免れるため、時には洒落をきかせるためにダブル・ミーニングを用いたりする。ホームステイ先の方が一所懸命その意味を説明しているにもかかわらず、何一つ呑み込めなかった点が非常にもどかしかった。このような事柄は、言葉だけではなく、現地で生活に溶け込んでこそわかってくるものだと思うので、文化も同時に吸収していきたい。

5. 本プログラムに参加した感想や、今後どのような留学プログラムがあれば参加したいか、希望をお聞かせください

本プログラムのおかげで、地域研究に欠かせないフィールド調査が行うことができ非常に感謝している。本プログラムに参加したのは三度目であるが、漸く現地での地盤が固まり、前回知り合った知人に紹介してもらいホームステイをすることができた。現地の方のお宅でお世話になったので、その土地の人や生活リズムが非常によく知ることができたことは最大の成果である。

*1 ページを超えないようにしてください。

* **プリントアウトして、署名を記入の上、提出してください。**

署名